

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00311

研究課題名（和文）近世連歌の総合研究

研究課題名（英文）A comprehensive Study of Renga in the Edo Period

研究代表者

綿抜 豊昭（watanuki, toyoaki）

筑波大学・図書館情報メディア系・教授

研究者番号：30211676

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：翻刻されていない連歌の翻刻を行った。連歌の式目のデータベースを作成した。連歌の表現研究のために、新たなデータベースシステム「かぐや」を作成した。江戸幕府が行った連歌のデータベースを作成した。以上のように江戸時代の連歌の基礎的な研究システムとデータベースと翻刻資料を整えた、今後の江戸時代の連歌の研究の基盤を構築したことが成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

江戸時代の連歌は、文学史研究において遅れていた。しかし、江戸時代も宗教的な場では継続的に行われていた。連歌は、江戸時代の、宗教的、儀式的な文化を解明するうえで看過できない文芸である。本研究はその研究の基礎となる資料について、翻刻やデータベースを作成したので、今後、江戸時代の連歌の研究に有益と考えられる。

研究成果の概要（英文）：Reprinting of renga that had not been reprinted was conducted. A database of Renga Rule was created. A new database system "Kaguya" was created for the research of renga expression. A database of renga performed by the Edo Shogunate was created. As described above, we have established a basic research system, database, and reprinted materials of renga of the Edo period, and have built a foundation for future research on renga of the Edo period.

研究分野：近世文学

キーワード：連歌 文化

### 1. 研究開始当初の背景

「連歌」という文芸は、中世文学を代表する一つのジャンルとして、はやくに山田孝雄、福井久蔵の研究があり、その後、伊地知鐵男、金子金治郎、木藤才蔵、島津忠夫らによって、中世連歌の資料や連歌師について充実した基礎的な研究がなされ、さらにその後、両角倉一、奥田勲、広木一人、勢田勝郭らによって細密な研究がなされ、今日に至っている。そして、近世の連歌については、文芸としては俳諧に取って代わられたとされ、その研究がほとんどなされていない状況である。確かに、近世文学の特徴ある文芸として俳諧があり、連歌は中世以来の古い文芸であることは否めない。しかしながら、形式的には類似する俳諧がさかんに行われるようになったからといって、連歌がまったく行われなくなったわけではない。武士の間では、幕府が行った、いわゆる「御城連歌」を中心として、儀式として全国的に行われており、神仏に祈願する方法の一つとしての連歌もさかんに行われている。そうしたことから文学史としては無論、文化史としても注目すべきである。しかしながら、先述のごとくごく一部しか研究されておらず、全体像のおおまかなところが明らかになっていないのが現状である。そこで、近世連歌を総合的に解析し、他の近世文学の表現と比較検討し、近世文学の特徴を明らかにする必要があると考えたことが研究開始当初の背景である。

### 2. 研究の目的

近世連歌資料を幅広く調査し、資料のおおまかな全体像を明らかにし、それらの資料を分析することによって、これまで明らかでなかった近世連歌の特徴を、連歌会、連衆といったハードな視点と、作品の表現というソフトな視点の二面から明らかにし、またその特徴を明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

中世の連歌については、国文学研究資料館によってほぼ全国的にどのような資料が存在するかが調査されている。その調査が行われる過程で、具体的に連歌の何を調査すべきかといった調査方法はほぼ確立されているといえる。まず、そうした方法を用いて、現存する近世資料を幅広く調査することが第一段階である。また同時に、現地調査が困難な資料の場合は、紙焼き写真やデジタルデータで資料収集が可能なものは、それを調査する。次に、いつどこで誰が参加した連歌会であるかを分析する。また大半が未翻刻であるので、翻刻しデジタルデータ化する。そのデジタルデータを用いて連歌作品の表現に着目して分析する。以上を通して近世連歌の特徴を明らかにし、またこれまでの研究成果が豊かな中世連歌の連歌のそれと比較することによって、その特質を明らかにする。以上をもって近世連歌を総合的に分析する予定であった。ところがコロナが流行し、連歌資料を所蔵する機関などの現地調査がかなわなかったため、主にインターネット上に公開されている連歌資料の調査を行い、未翻刻のものへの翻刻を行う、そして分析等をする。また連歌の表現分析のためのデータシステムの開発を行う。また作品理解のため、式目のデータベースを作成する。

### 4. 研究成果

研究の方法であげた「主にインターネット上に公開されている連歌資料の調査」については、現在、インターネット上に公開されている富山市立図書館山田文庫の連歌資料を調査し、そのうちの百韻連歌二十四巻を翻刻し、デジタル化した。山田文庫所蔵の、仙台藩で行われた「七種連歌」のうち、初代藩主伊達政宗が一座した連歌作品はすべて翻刻した。その結果、「七草連歌」は定型化した連歌であったことが明らかになった。また翻刻したものについては、『近世連歌集(一)』として印刷製本し、連歌研究者に配布した。

また富山市立図書館山田文庫所蔵の富山藩士が行った連歌百韻四巻を、インターネット上に公開されたものを調査し、翻刻した。筑波大学が所蔵する京都・北野天満宮旧蔵の連歌百韻三十巻を、原本調査し、翻刻した。また国会図書館が所蔵する筑波山連歌を紙焼き写真で調査し、百韻二十巻を翻刻した。石川県小松市にある小松天満宮所蔵の百韻連歌を原本調査し、百韻十巻を翻刻した。北野天満宮、小松天満宮の連歌は定型であり、富山藩士の連歌、筑波山連歌には、中世には見られない表現が見いだされた。なお翻刻した次にあげる全文検索システム「かぐや」にデータ入力する予定である。

次に近世連歌研究の表現研究に役立つように、俳諧・和歌・古典資料に対する全文検索システム「かぐや」を作成した。連歌研究者に実験的に入力してもらった結果、入力方法のルール化が今後の課題であることがわかった。またこのシステムの活用を視野に入れ、綿拔は、西村純、若林啓らの研究「対話型連歌システムにおける文脈を考慮した句の返答手法の検討」(第36回人工知能学会全国大会において発表)に参加した。

徳川幕府が毎年年頭に行っていた、いわゆる「御城連歌」13年間分(百韻十三巻)を、エクセルを用いて各句を入力し、単語単位では同じものが何度も使われるが、同じ表現が句単位では用いられていないことが明らかになった。「御城連歌」の悉皆調査と入力在今后の課題である。

連歌で用いられる用語が、どのような式目とかかわるかを明らかにするために、あいうえお順の連歌式目辞典を作成し、各語で検索できるようにした。  
なお全文検索システム「かぐや」のマニュアル、「御城連歌」百韻十三巻をエクセルに入れたもの、連歌式目辞典、以上3点については『近世連歌の総合研究成果報告』として印刷製本して、連歌研究者に配布した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 綿拔豊昭	4. 巻 65
2. 論文標題 筑波大学附属図書館所蔵『袖中抄』について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中央大学国文	6. 最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本啓介	4. 巻 52
2. 論文標題 藤原俊成と誹諧	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 青山語文	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本啓介	4. 巻 52
2. 論文標題 大東急記念文庫蔵『宝徳和歌集』について-付 翻刻 -（上）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 かがみ	6. 最初と最後の頁 28-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本啓介	4. 巻 51
2. 論文標題 中世勅撰和歌集考 - 『続千載和歌集』巻七「雑体」をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 青山語文	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 綿拔豊昭	4. 巻 41
2. 論文標題 加賀藩前田家「菅公八百年忌奉納連歌」について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 調査研究報告（国文学研究資料館）	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本啓介	4. 巻 349
2. 論文標題 『称名寺連歌懐紙』再考	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 金澤文庫研究	6. 最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本啓介	4. 巻 53
2. 論文標題 大東急記念文庫蔵『宝徳和歌集』について-付 翻刻 -（下）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 かがみ	6. 最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山本啓介
2. 発表標題 勅撰和歌集の故実について－「此奥口伝所々抄出」と『愚秘抄』－
3. 学会等名 和歌文学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

綿抜豊昭、山本啓介は、連歌百韻二十四巻を翻刻し、『近世連歌集』と題して2021年3月に印刷製本し、連歌研究者に配布した。  
綿抜豊昭、山本啓介は、構築した「古典検索システムかくや」のマニュアル、柳菴連歌十三巻の各句索引、連歌式目の辞典を『近世連歌の総合研究成果報告』と題して2023年2月に印刷製本して、連歌研究者に配布した。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山本 啓介  (yamamoto keisuke)  (50601837)	青山学院大学・文学部・教授    (32601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------